

教科「図画工作」の「感性」を踏まえた「学習評価」の研究

～ 沖縄の伝統文化財“シーサー”を用いて～

玉城 哲人*¹、嘉島早奈江*²

新学習指導要領図画工作科の教科目標の中に「感性を働かせながら」という文言が新たに加えられた。これは表現及び鑑賞の活動において、児童の感覚や感じ方などを一層重視することを明確にするために示されている。しかし、そのような観点を踏まえ教育実践を行うには、「感性」の捉え方や理解が不可欠である。また、これまでの技術偏向型の学習や児童の作品に対する主観的な評価から、児童一人一人の資質や能力が発揮できる授業及び評価への更なる転換が求められているとも言える。ここでは、小学校低学年の児童生徒を対象にした“シーサー”制作の実践を例として、図画工作の感性の捉え方とそれを視点に据えた「学習評価」の方法を探ることを目的に研究したことを報告する。

＜キーワード＞ 図画工作 感性 学習評価

1. はじめに

「感性」は、人や場面によって捉え方が様々であり、一般的な共通の意味として把握することが難しい言葉である。それは、自らの実感としての感覚や感情に対する理解から高度に抽象化された学術的な概念まで及ぶ包括された言葉として捉えられるからである。学習指導要領解説図画工作編では、感性の意味について「様々な対象や事象を心に感じとる働き」とし、その他「感覚」、「感じ方」、「表現の思い」などと解説されている。また、各出版社の解説書及び指導書においても概ね同様な解説が多数見られる。それらの解説は、自己の内面における「感受性」という「受容的」な印象として受け取られ、感性が見取ることのできない、把握することが難しい物として捉えられる懸念がある。もし、教師自身がそのように受け止めたとしたら、児童一人一人の感性を重視した学習指導や評価に困難をきたし、ひいては消極的な指導に陥るとも限らない。

平田(2008)は、「幼稚園教育要領の基本と解説」の中で「『情報・刺激→感覚器官→イメージ→行動』という一連の流れが『感性』なのです。そして、一連の流れにおける『行動』が『表現』なのです。『イメージ』の部分だけが感性だと思いがちですが、行動をしてみればじめて感性といえます。」と述べ、感性の捉え方を示した。この捉え方は、感性が「行動」すなわち「表現」にまで及んでおり、「表出的」な概念として捉え見取る事ができる。そのことは児童の造形活動における様子や表現(作品)そ

のものが感性であることを意味している。また、その解説書の中で、行動(表現)は次の自己のイメージに繋がる「内的循環」を伴うことも示している。このことは、学習指導要領の基本理念である「生きる力」を支える「習得—活用—探究」の「学力」観と、表現や鑑賞の活動において、発想や構想しながら習得し、活用し、反復し、新たな探究へと向かおうとする意欲を支える能力と共通し、関連性を示唆するものと考ええる。

図画工作の学習評価は、改訂された指導要録と国立教育政策研究所からの「評価基準の作成のための参考資料」を基盤に、評価の具体策を立て実践に移すものである。図画工作科の目標に準拠し、各学年の目標や題材の目標に、その指導内容と評価内容を一体として盛り込み、学習状況の課程で見取る評価を行うことを示している。そこには、児童の資質や能力が発揮できる題材や目標を設定し、その目標に向かって指導法の工夫と実践を行い、目標に照らし合わせて児童一人一人の学習状況の評価し、それらをもとに授業改善に取り組む教師の姿が求められている。本研究では、前述のことを踏まえ、「感性」を視点に据えた図画工作科の学習評価を探ることを目的として研究を行った。

2. 学習評価の作成

今回、小学校低学年の児童生徒を対象に「評価基準の作成のための参考資料」を基にして、“シーサー”制作の学習評価の作成を試みた。

*1 TAMAKI, Tetsuto : 沖縄女子短期大学 , *2 KASHIMA, Sanae :

- (1) 学習の主題
感じたことや想像したことを基に表したい事を見つけ思いのままに表すことを楽しむ。
- (2) 題材名
「ぼく・わたしのシーサー」【A表現(2) 立体に表す】第1学年 6時間扱い
- (3) 題材の目標
①イメージをもとに思いのままに表す事を楽しむ。
②ちぎる、つまむ、ねじる、伸ばす、付けるなどの粘土の基本的な技法を試しながら、形や感じに思いを巡らせてつくる。
- (4) 題材の評価基準(観点別評価)
【造形の関心・意欲・態度】**関**
・自分の好きな“シーサー”をかくことを楽しもうとしている。
【発想や構想の能力】**想**
・つくりたい“シーサー”を思いつき、どのような形にしようか考えている。
【創造的な技能】**技**
・つまみ出す、付ける、へらで模様を刻むなど表し方を工夫している。
【鑑賞の能力】**鑑**
・自分や友人が作った“シーサー”について、楽しく話しながら、作品の良さに気付いている。

(5) 題材の指導計画

【第1時】(6月)

■粘土の指導(粘土に慣れる)

- ・粘土をのばしたり丸めたりして、形作りの指導や粘土のくっつけ方などを指導する。

【第2時】(7月)

■シーサーを描く(1回目)

- ・何も資料を提示せずシーサーを描く。(子どもたちそれぞれの思うシーサーを描く)

【第3時】(10月)

■シーサーの歴史や由来について学習する。

■シーサーを描く(2回目)

- ・学習後のシーサーを描く。

【第4・5時】(10月)

■シーサーを作る。

- ・粘土を用いてシーサーを作る。

【第6時】(10月)

■作品の鑑賞を行う。(ワークシート)

(6) 学習活動の流れと判定基準 表1参照

3. 今後の課題

本研究は、教育現場での実践を通して進めていくものであり、現時点ではその途中経過である。今後は、作成した観点別評価の評価基準と判定基準を基に学習評価を行い、感性を視点にすえた学習評価の在り方を研究して行く。

学習活動		おおむね満足 (B)	十分満足 (A)
1/6時	○自分が思い浮かべた形になるようにつくり方を工夫しながらつくる。	技 つくりたい形になるようにつまみ出す、付ける、へらで模様を刻むなど、表し方を工夫している。	技 つくりたい形になるようにつまみ出す、付ける、へらで模様を刻むなどのいろいろな方法を組み合わせ、表し方を工夫している。
2/6時	○シーサーを思い浮かべ、どのようにかくか考える。	想 シーサーのことを友人などに話しながら思い付き、どんな形で何色だったか考えている。	想 シーサーのことを思い付いて、その形を考えたり色を思い付いたりして、次々とアイデアを考え付いている。
3/6時	○シーサーについて学習したり観察したりして特徴をとらえながらかく。	関 自分の好きなシーサーをかくことを楽しもうとしている。	関 自分の好きなシーサーを思い付き友人とどんなところが好きかお話ししながらかくことを楽しもうとしている。
4/6時	○学習や観察した絵を基に、自分のつくりたいシーサーを考え、つくり方を工夫しながらつくる。	想 シーサーの特徴やおおよその体の形からつくりたいシーサーの形を考えている。	想 シーサーの特徴やおおよその体の形からつくりたいシーサーの形や何かしている様子やポーズなどを考えている。
5/6時		技 つくりたいシーサーになるように、つまみ出す、付ける、へらで模様を刻むなど、表し方を工夫している。	技 つくりたいシーサーになるようにつまみ出す、付ける、へらで模様を刻むなどのいろいろな方法を組み合わせ、表し方を工夫している。
6/6時	○つくりたいシーサーになったか友人と見せあったり話し合ったりして振り返る。	鑑 できた作品を互いに見せ合ったり話し合ったりしながらシーサーの工夫しているところなどに気付いている。	鑑 できた作品を互いに見せ合ったり話し合ったりしながら、シーサーの工夫していると気付いたところを自分らしい言葉で具体的に伝えたりしている。

(表1) 学習活動の流れと判定基準